

小頭岳

H・21・12・28(月)
新合地区振興会
振興会便り
文責:佐々木 元
NO. 8

新合小の統合問題で要望書を提出していましたが、12月15日(火)市議会文教厚生委員会7名と市教育委員会から4名が新合小に来校されました。向校長、同窓会長、PTA会長、振興会長の4名が対応しました。文教厚生委員会としては、「まず、子ども中心に考える。新合小だけの問題でなく市全体にかかわる問題であり、地域振興にもかかわる重要課題なので充分慎重に審議したい。」とのことでした。

おしらせ

- 1月1日 元日登山 6:00 津留神社集合出発
- 1月1日 新年祝賀式 11:00 新合公民館
どなたでもご参加ください
- 1月2日 新合地区成人講座(7名) 新合公民館

長寿の秘訣はお休みしました。

元日登山で新春のスタートを！ ～頭岳登山道の整備完了～

元日登山を前に頭岳登山道の整備を新合地区振興会地域環境部会(部会長:小川勝幸さん)を中心に実施しました。まず、12月3日に駐車場でのUターンやバック時の安全確保のために杭を打ちロープを張りました。これには部会長の小川さんが駐車場の点検や用具の購入等に精力的に取り組んでいただきました。また、杭打ちロープ張りには大塚達也さんも協力していただきました。さらに、当日の準備は歳田秀孝さんに協力していただきました。

平成22年がすばらしい年になるように多くの元日登山を期待しています。



全校合唱
『鉄腕アトム』

子どもへの愛情がにじみ出る ～新合小学校フェスタ～

11月29日(日)に新合小学校の「新合小フェスタ」(学習発表会)が「祖父母学級」と「地域総合学習の会」も兼ねてありました。子どもたちの「群読」や「合唱・劇・体育的発表」などに加えて、PTAの「ダンス・歌」、先生方の「歌」、PTAとOBのピノキオのパネルシアター、それに「ふれあいタイム」で老人会と子どもたちのふれあいの時間がありました。午後はPTAのバザーがあり盛会でした。

今年も子ども達がこれまで取り組んできた学習の成果が十分伝わるすばらしい発表会でした。また、先生方やPTA、ピノキオの発表も子どもへの愛情が随所に感じられる感動的な内容でした。参観者も用意された椅子には座りきれず体育館いっぱいになるほどでした。中には河浦高校の校長先生の奥さんや遠くは富岡からPTAのメンバーの恩師の方などもフェスタの噂を聞きつけて参加されていました。91歳になるお年寄りの方が「子どもはかわいいですね。子どもは宝ですばい。」「親も先生方もがんばっとらすな、忙しからずとに、いつ練習されたとじゃるかいかい？」と話されていました。また、「一回じゃもったいなかなあ、一年に三回ぐらいはしてほしか！」と感動されて帰っておられました。PTAの女性の方の「こぎゃんすばらしかが出来っともあと二、三年かな？統合はやっぱりせんがよか！」と言う声も聞かれました。

頭石(かぐめいし)地区など視察研修

～地域おこし検討委員会アンケート結果に基づき～

地域おこし検討委員会(会長:武内正俊)ではアンケート結果に基づいて、12月9日(水)～10日(木)の2日間宇城市小川町～水俣市方面の視察研修を実施しました。まず、福祉関係では、宇城市指定認知症対応型通所介護『オレンジハウス』を視察しました。「自分らしく安心して生活が送れるようお手伝いします。」をモットーに取り組んでおられました。特に施設内に『憩いの広場』としての「コミュニティスペース」を設け一般の人の家族団らんの場合や天然温泉施設(無料開放)などで地域との交流を図っておられました。環境関係では、水俣市内で水俣市立水俣病資料館や県立環境センターを研修しました。まちづくり全体としての取組では、水俣市頭石(かぐめいし)地区の視察をし、研修を深めました。約800年前の平家の落人の里と言われるだけあって、水俣市内から10km以上もある山林99%、平地1%の山奥の地区。1960年代の高度経済成長の頃は山の景気もよく60世帯・250人居たが、今は40世帯・120人である。少子、過疎化が進行中で「まちづくり」を始めたのが7年前とのこと。「村丸ごと生活博物館」として、利益を上げる農家だけでなく、「元気になるまちづくり」を目指し、行政に頼らない、地区にある物を活かす、(昔からの生活・足下を見直す)視察者からも学ぶ、等々の考えを土台に体験の場の取組み 小さなレストラン 毎週1回弁当販売150食(地元産だけの食材で作るのでそれ以上は作れない。) いままで捨てていた栗、柚子の販売 加工所の設置(現在進行中)などの取組みが見られた。今までに、国内外から5千人の視察があり、現在の地区の平均年齢は50代(後継者)がほとんどであること。地区住民の意思統一は地区の環境協定(草刈りボランティア)などからスタートしたという。

とてもよい研修であった。いよいよ新合の「まちづくり」の具体化の検討段階である。



頭石コミュニティーセンターで研修中

『道路工夫物語』(1)

中学校で長年指導されている習字の中で「温故知新」というのがある。論語に出てくる言葉で「古きをたずねて新しきを知る。」という意味がある。今私たちは先人が残し、伝えてきた技や精神を失いかけている。その中には失ってはならない技や精神が多くあるはずである。まさに「温故知新」の願いを込めて『道路工夫物語』を書くことにした。これは、上津留区の久保惣八さんから聞き書きしたものである。惣八さんになりきれない心許なさもあるが紹介したい。まずは楽しく読んでいただければと思っている。(2009.5.4 自宅にて聞き書き)

54年前(昭和30年8月16日)、25歳の時、三宅利満さんの後を引き受けてくれないか?という話があり県土木事務所に面接に行った。その日に採用ということで「今日から仕事をしてくれ」と言われたが「今日は中途半端になるのでしない。」と言った。多くの人に面接を依頼してあったが、面接前に道路工夫をバカにして断ってしまうとのこと。その翌日から仕事をすることとなる。(次回につづく)



炭焼き中の
吉川さん

がんばってま～す! ～炭焼き～

12月15日(火)立原の吉川軍志さんの炭小屋(木炭)を訪問した。その日は朝5時から火を焚いているとのこと焚き口は炎が勢いよく燃えていました。隣には火を止めて明日出す予定の釜がありその隣は木材を詰め込んだばかりの窯で、3つ炭窯(ソガマ)を所有。1回の作業は木材切り出しから箱詰めまで12日間掛かり、1つの窯で5～6百kg焼けるとのこと。木炭生産は6年目になるが、ベテランだからうまく焼けるとは限らない。一窯、一窯初心者と同じように神経を使うとのこと。また、生産した炭は地元『立原の里』での販売はもちろんのこと、主に阿蘇方面に出荷。価格も6年前と同じでなかなか高くないなどの悩みもあるが、場所は広いし、雑木山に囲まれ原料は豊富だし木炭生産も消費に応じきれないので仲間が増えてくれることや『さざんか公園』に1カ所炭窯を作ったらどうかという話など木炭生産への夢が尽きないようだった。しかも、笑顔で生き生きとした話しぶりから炭焼きが楽しくてたまらないといった印象を強く受けた。お話を聞きながらガネ汁(ツガネ)と生椎茸の焼いたのをいただいたが、炭窯の炎とモクモクと昇る煙を眺めながらの味はまた格別なものだった。